

昭和前期の図像学

ガラス乾板から浮かび上がる群像

伊藤 純

図像学 (iconography) は元来、ヨーロッパ中世絵画に埋め込まれた一定の宗教的意味を示す“符牒的”図像を探索する学問だった。近代に至って、広く画像総体から読み取れる情報を探索し論じるものとなり図像解釈学へと展開するが、今われわれが虚心に図像が訴える意味を受け止めようとすると、さらなる拡大解釈が必要になってくる。

小さな図像が、さまざまの、とりわけその“人間”が時代と関わり合って実在する有り様を、符牒的意味を越えて伝えてくる。そして図像は、それを見るものの観察態度に対応して多様な意味を開示してくる。

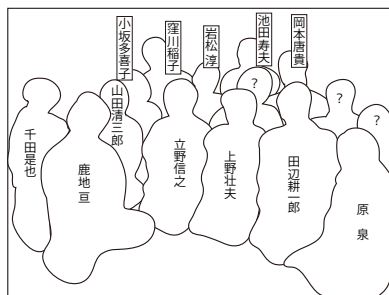
——一九三三年二月二十一日深夜の“小林多喜二”

数十枚のガラス乾板（大名刺判〔6.5cm×9cm〕その他）が、貴司山治の遺品の中から発見された。デジタル化してポジ像に

変換してみると、いくつか、注目すべき画像が検出された。（なお、本稿では発見されたガラス乾板の実態を示すため、原則としてトリミングせず乾板の縁まで入れ込んだ図像をお示しする。例えば図像1のポジ像上縁のメクレのようなものは、ゼラチン膜がガラス面からはがれている現姿である。）

図像1に示す写真は、小林多喜二虐殺直後の写真としていろいろな刊行物に掲載されている。ただ、どの刊行物でもこの写真が、いつ誰によって、どのような状況下で撮影されたものか記載されていない。私は従来、小林多喜二虐殺直後、官憲が厳しく監視している状況下で、遺骸が置かれた小林宅に、一私人がカメラを持ち込んで撮影するというのは不可能だろうから、比較的取材が可能だった新聞社のカメラマンが撮ったものではないか、と考えていた。

ところが、今回見出されたガラス乾板の中に、この写真のネガが発見されたのである。さらにもう一枚、ほとんど流布され



図像 1-2：小林多喜二の虐殺遺骸を
前にした人々 人物名

『新日本文学』一九五〇年二月号に掲載されている「小林多喜二の死とその前後」という座談会記録が、上記の画像の背景説明として整合するところが分かった。

この座談会は、戦後三年余（一九四九年三月六日）、あの虐殺から十六年後という時期に

この座談会は、戦後三年余（一九四九年三月六日）、あの虐殺から十六年後という時期に



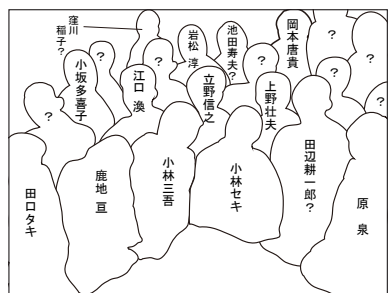
図像 1 : 小林多喜二の虐殺遺骸を前にした人々

ていない、撮り損な
いとも思われる手ぶ
れと露出ムラの激し
いガラス乾板も見出
された。(図像2)

この二枚のネガは
子細に見て、何か既
存の紙焼きの印画な
どを複写した形跡は
なく、二枚ともオリ
ジナルのネガ原版だ
と判断される。

そこであらためて

そこであらためて



図像 2-2：“遺体を前にした人々、人物名

それによると、小林多喜二が築地警察署内で死亡したという情報は、翌二月二十一日午後のラジオで報じられ、夕刊各紙に大きく掲載され関係者の知るところとなる。この段階から、当時「時事新報」

それによると、小林多喜二が築地警察署内で死亡したという情報は、翌二月二十一日午後のラジオで報じられ、夕刊各紙に大きく掲載され関係者の知るところとなる。この段階から、当時「時事新報」



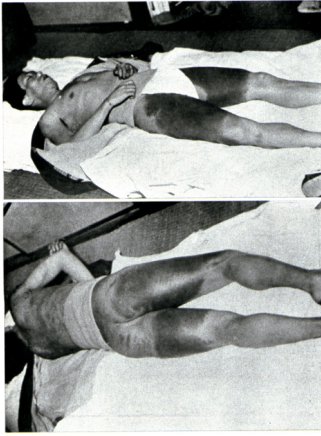
図像2：ぶれの激しい“遺体を前にした人々、

行われたものである。中野重治の自宅を借り（中野自身は要務で旅行中）多喜二の母セキさんはじめ十五人が集まり、半日ばかりで行われた。既に記憶の錯誤や食い違いがいくつか現れてきているが、総体として、複数の当事者の陳述の突き合わせによって、虐殺直

の記者だった笹本寅⁽¹⁾が、新聞カメラマン⁽²⁾（座談会では「前川」という名前が記載されている）を連れて関係者をフオーロし事態の把握に重要な役割を果たす。

多喜二の遺体が、警察との厳しいやり取りの末に引き取られ馬橋（現・東京都杉並区阿佐谷南二丁目）の自宅に安置されたのが二十一日午後十時頃とされている。前記座談会によれば、安置直後、医師安田徳太郎⁽³⁾が詳細な検屍を行い、拷問の痕が生々しい遺体の状況は、この座談会でも詳細に記述されている。その時、屍体の外況が写真撮影されており、この写真も広く流布しているが、撮影の背景はやはりほとんど説明されていない。

これも、前記座談会での立野信之の言葉「……僕は笹本からもらった屍体の写真も持っていた。」によって笹本寅が時事カメラマンに撮らせたものであることが想定できる。しかも、立野の陳述は、官憲が小林家に出入りする人間をくまなく



図像3：小林多喜二の遺体の外況⁽⁴⁾

検束しようとしてい
る最中のこととなっ
ている。特高が張り
込み、誰彼となく
検束をかけるよ
うになったのは
二十二日夕刻以
降なので、笹本

は二十一日深夜、まだ官憲の張り込みが甘かった時点で、安田医師の検屍に居合わせて遺体を撮影し、撮影したネガをすぐに現像焼き付けして、二十二日ないしそれ以降にわざわざ小林と親しかった立野信之に手渡したことになる。笹本の、事態に対する強い「気持ち」が感じられる。

多喜二の遺体は二十二日、慶應大、東大、慈恵医大に解剖を忌避され、空しく市内を巡った後再び馬橋の自宅に戻った。警察はこの動きに、虐殺の事実の公然化を怖れたのか、これ以降馬橋の自宅の警戒が著しく強化されたことが前記座談会で語られている。従って、拷問の明白な証拠となる無残な遺体の状況は、二十一日深夜という警戒空白のわずかな瞬間に、笹本らによって撮影され立野に手渡されたものであり、これが唯一「歴史」に残る図像となったのである。

他方で、図像1、2は、また警察の妨害張り込みが行われる以前、二十一日の段階で貴司によって撮影されたことが、同じく座談会での貴司の「……その晩僕がとった写真があるが、女の人はおらんよ。」という発言で推定される。

この発言は江口渥が、二十一日夜、田口タキ、小林幸と、もう一人の女性が、安置された遺体の「右手の枕許にずらりと一列に坐つて」「斉にワーツと声を挙げて泣いた。」という極めて具体的な陳述を行ったのに対して、そういう状況は写真からは認められないと述べたものだが、ともかくこのことによって、その夜、貴司がカメラを持って写真撮影していたことが分

かるのである。

因みに、江口が物語った三人の女性のエピソードはおそらく、貴司や千田がデスマスク作成の手配のために遅れて馬橋に帰ってきた、それより以前の時間に起こったことであろう。

また、江口が名前を特定していない三人目の女性は、現在では、田口タキの小学校の同級生で親友の、後に劇作家となった岩名雪子であると推定されている。

同座談会の記述によると、貴司は二十一日夕刻、夕刊報道で事態を知り、時事新報に笹本寅を訪ねて、警察の警戒下でも比較的行動しやすい新聞記者の笹本にフォローを依頼し、その後築地警察署、前田医院、築地小劇場などを経巡って、集まった人々と事態の対応にあたろうとした。

その築地小劇場に「多喜二の妻」と名乗る女性が突然現れる。原泉や貴司など居合わせた人々が「多喜二の妻」などと名乗っていると警察にどんな危害を加えられるかわからないので、何とかなだめて馬橋の小林宅にとりあえず赴かせた（この女性は伊藤ふじ子だったと推定される）。この「処置」にけっこう手間取ったようで、その後貴司は千田は也などとデスマスク採取の準備のために別行動をとり、深夜に至って馬橋にたどりつき、はじめて凄惨な遺体に対面する。

前記二枚（図像1、2）の写真は、この時に撮影されたものと考えられる。それは、著しい手ぶれ、めっちゃめちなライティ

ングなど、通常なら失敗作として捨てられるレベルの写真である。しかし今に残るその図像からは、想像を超える異常な事態に直面した撮影者の動揺と切迫感が伝わってくる。

大名刺判のカメラはジャバラのついた大きなカメラで、三脚を使うのが普通である。⁽⁶⁾まして深夜の暗い室内で、当時の感度の低い乾板では相当の長時間露出が必要となる。この二枚の写真に關しては、著しいライティングの偏りや、人物に強い影が出ていることなどから閃光電球（フラッシュバルブ）⁽⁷⁾が用いられていると想像されるが、同時におそらく相当な長時間露出も併用されている。そのため、動かない障子の棧や多喜二の顔はいくらかましたが、「生ある」人物たちは長時間の静止に耐えられず動いているために、二重三重のブレが生じている。図像1の最左端、千田は也の右側の障子に人の顔が薄く浮かび上がっており、ネットでは「心霊現象」などというツイッターもあるが、これも長時間露出の二重像であろう。

図像2になるとブレに加えてピンボケと不適切なフラッシュで中央部分が白く飛んでしまっている。

私はこの二枚の写真は、図像2がまず撮られ、ついで、遺体のまわりの人を入れ替えて図像1が撮られたと考える。図像2では、写真を撮るからといって、遺体と母親セキさんを中心に自然に人々が蟬集してきた生々しい雰囲気が生きている。右端で原泉が涕泣し、セキさんの左隣では、江口渙が多喜二の弟三吾の肩に手をやって、涙を拭っている三吾の顔をカメラの方へ

向けようとしているのであろうか。その横の鹿地亘は頭を垂れて為すところがない風である。おそらく、惨憺たる遺体が運び込まれてそれほど時間がたっていない……医師安田徳太郎による屍体の検案を目の当たりにして打ちのめされた人々の姿が、撮影者の動揺も含めて、写し取られているとみるべきであろう。そして、何とか気を取りなおして、人々の配置を入れ替え、怒りと抗議の意志を示すポーズをとった関係者が密集している構図を狙おうとしたのが、画像1の画像ではないかと考える。ここでも、意図しないブレとボケによって、写真は、心霊画像が映り込んでいるのではないかと八十年後の若者がツイートするような異様な様相となった。

貴司は写真技術については十年近い関歴があり、普通ならこんな写真の撮り方はしえないと思われる。明らかに取り乱し、疲労している。そして、このような姿で残された画像が、一九三三年二月二十一日深夜という時間の、抜き差しならぬ一瞬の意味を記録するものとなっていると思う。

……もしこれが、綺麗に明かりがまわり、ピントが決まった、明々白々たる写真だったら、われわれの想念は、相当に異なったものになったのではあるまいか。

二 一九三五年二月二十一日の“集合写真”

それから二年。三回忌の翌日にあたる一九三五年二月二十一

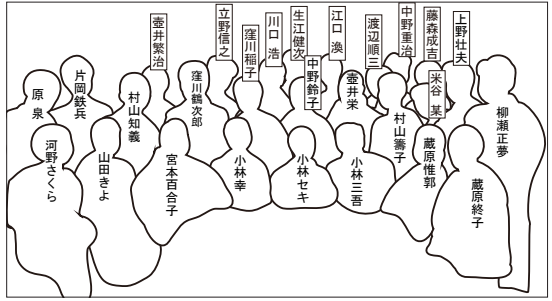
日の夜である。東京神田神保町の、電車通りから少し南に入った大雅楼という中華料理屋で“あの人”を偲ぶ会が開かれた。この時の参会者の集合写真が、二枚のガラス乾板として遺されている(画像4、5)。非常によく似た画像だが、よく見ると異なる点がある。

画像4がいろいろな刊行物に流布している画像で、人々は数人を除いて、おおむね固い表情である。おそらくこれは、どのような集合写真でもありそうなことで、1ショット目は緊張して硬い表情になる。そこで撮影者が「少し笑って——」などと注文をつけてもう一枚撮る。その結果、人々が微笑んでいるも



画像4：1935年2月21日の「偲ぶ会」記念写真・硬い表情のショット

う一枚の原版(画像5)ができた。多分そういう成り行きだっただろう。原版が貴司の元に遺されているし、画面にその姿が無いことから、撮影者は貴司自身である。ただそのこと



図像 4-2 : 「偲ぶ会」記念写真人物名

よりも、この二つの類似した図像での、人々の表情の違いから、いろいろな想念がわいてくる。

一番印象に残るのは、蔵原惟人の父、蔵原惟郭これひろの表情である。蔵原惟郭は九州阿蘇神社の神官の家に生まれ、北里柴三郎の妹を妻とした名門の士であり、教育者、衆議院議員となつたいわば明治の進歩的知識人である。その惟郭は、図像4では端然と前を見つめているが、図像5となると、

実に屈託の無い笑顔にかわつている。つまり、笑え、といわれればこたわることなく莞爾として笑つてみせられる……明治の大物の風貌である。(因みに、上記により、蔵原惟人は日本近代医学の祖ともいべき北里柴三郎の甥である。)

同様に、宮本百合子の二枚の画像での差異にも、似たような素直さが感じられる。図像5の笑顔にはいやみがない。概して最前列の小林セキ、小林幸、そして宮本百合子という三人の女性の笑顔は印象に残る。

少し変わった印象を受けるのは村山藩子かずこである。この女性



図像 5 : 1935 年 2 月 21 日の「偲ぶ会」記念写真・微笑んでいるショット

図像5では「ナニサ」といったアグレッシブな顔つきとなる。

図像4でも5でも、真面目すぎる表情で固まっている窪川稲子と対照的である。

右端の柳瀬正夢も面白い。貴司の自伝「私の文学史」では柳瀬は時間を守れない人物らしく、約束の時間から数時間も遅れてくることしばしばだが、憎めないニコニコ顔をみると怒る気が失せてしまう、と書かれている。⁽⁸⁾ここでも、二枚の画像の両方で大いに笑っているのは柳瀬だけである。実際はシビアな非合法活動も経験してきた活動家だが、その笑いはシビアな時代を生きるための方略だったのかもしれない。

は、他の多くの図像でもセーターにベレー帽といった、当時の女性としてはボーイッシュなモダンガールという姿で登場する。図像4では、みなが硬い表情の中で一人笑顔である。それなのに、多分「笑つて」と注文されたであろう図

……時代は明らかに二年前とは色を変えている。満州国は既成事実化し、日本は「軍」という政治勢力にリードされ、東アジアへの軍事進出で時代を切り開こうとしていた。小林多喜二の同志ともいべき文学者たちは、組織を失い、この「時代」に対して孤立無援で立ち向かい、生活していかなざるをえない局面に立たされていたはずだ。この二枚の集合写真は、そのような時代の一つの断面を示す図像として読むと、また、ある感慨を感じ取ることができる。

三 “速達の切手代もなくなった” 文学案内社の一隅で

いつも機嫌のいい笑顔を浮かべている柳瀬正夢が、寒々とした事務所の片隅で、オーバーの襟を立てて縮こまっている。銀座の片隅にあった「文学案内社」の事務所の冬の光景である。この写真は『文学案内』一九三六年四月号の口絵に掲載されたものの原版である。

私は子供時代、何度かこの事務所（銀座西一木挽町（銀座東）と引越しているが、ともに銀座の場末に位置している）に連れて行かれた記憶がある。今、微かに残る残像は、その事務所の奥の窓をあけると、黒く動かない水をたたえた掘り割りが見えたことだ。それは何かひどく陰鬱な記憶として残る。……戦前、銀座は掘り割りに囲まれた一画だったのだ。だから、その場末……端っこの方に行くと、掘り割りに突き当たるのである。



図像 6 : 「文学案内社」の一隅で——左側上から丸山義二、小野春夫 (9)、右側上から貴司、世田三郎 (坂井徳三)(10)、柳瀬正夢。

雑誌『文学案内』は、貴司山治が一九三五年七月から一九三七年四月に亘って発刊した「啓蒙的」文学雑誌である。この時期、旧作家同盟系の人々が、プロレタリア文学運動の余韻の中で発刊し

た雑誌としては『文学建設者』『文化評論』とこの『文学案内』が挙げられるが、三誌の中では『文学案内』が、その名の通り最も文学志望者志向、大衆志向の風合いをもっており、もう一つ、中国、朝鮮、台湾という東アジアの文学を紹介することに相当の誌面を割いた、という特徴がある。

小林多喜二の通夜を写した大名刺判カメラは、二年後には文学案内社の業務用カメラとなって活躍する。巻頭のグラビア頁や座談会の参会者など、誌面に載っている写真に符合するいくつかのガラス乾板が残っている。

同誌一九三五年十月号（二巻四号）に「働く大衆の文学を建設



図像 7: 『文学案内』 一卷四号 (一九三五年十月号) 「働く大衆の文学を建設するために」座談会の口絵写真。人物: 右から細田民樹、大宅壮一、貴司山治、徳永直、杉山平助、舟橋聖一、青野季吉。

するために
——先輩文学
者の意見を訊
く」と題する
座談会が載っ
ていて、出席
者七人がう
つつた口絵写
真が添えられ
ている。座談
会はこの他に
島木健作、藤
森成吉も加

わっており、この二人が加わった乾板も存在するが、何故か誌面には二人の欠けた方の写真が掲載されている。

さらに、同誌二巻一号 (一九三六年一月号) では十三人という

大人数の「一九三六年の文学の展望を語る」座談会が行われた。その出席者には中野重治、平林たい子、舟橋聖一、石川達三などが網羅されており、ナップ系だけにとらわれぬ配慮が見える。記事の余白に「座談会のあとで一時間ほど舟橋さんとお話しして、同氏がよき御意思を抱いて居られることがよく了解された。……」という平林たい子の談が拾われている。「よき御意思」がなにを意味しているのかは不明だが、何かインスパイ



図像 8: もう一枚の不掲載分の写真。人物: 右から徳永直、大宅壮一、藤森成吉、舟橋聖一、島木健作、貴司、杉山平助。

アされたことが
あったのかと思
われる。

因みにこの座
談会は「四谷
三河屋」で開か
れたと注記され
ている。この三
河屋は江戸時代
から続く牛鍋の
老舗で、貴司が
好んで立ち寄っ
たことが日記に

も見える。(私も何度か連れて行かれた記憶がある。一九四三年、内蒙古への旅行出発時の「別離の昼食」もこの店だった)
その間にも時代は大きく動いていく。

図像 6 の寒そうな柳瀬正夢や坂井徳三が撮影されたのが、一九三六年一月頃と推定される。つまりそのすぐ後に二・二六事件が起こっているのである。貴司日記によると、都心は戒厳令の武装兵に制圧され数日は銀座の事務所にも近づけないという状況になる。戒厳令発令によって、軍によって左翼的経歴のある人物は拉致監禁され事務所は破壊されるのではないかと真顔で心配している様が記されている。事件直後に刊行された四

月号の編集後記（編輯レポート）には

四月号へ切真つ最中に、東京は戒厳令がひかれた。……その中で全員相談の上激変する状態に応じて四月号の、はじめ予告した内容を全部やり直し、この際避けるべき内容はつとめて避けることにし、本号は非常時を反映してごらんの如く前号とほぼ同じ大きさの雑誌にした。

と、目立つことを避けようという自己検閲が宣言され「非常時」という緊迫した時代の成り行きが見える。



図像9：『文学案内』二巻一号（一九三六年一月号）「一九三六年の文学の展望を語る」座談会の口絵写真。人物：前列右から村山知義、舟橋聖一、森山啓、平林たい子、島木健作。後列右から貴司山治、中野重治、石川達三、青野季吉、北川冬彦、藤森成吉、渡辺順三、遠地輝武。

そして『文学案内』は、二・二六事件の約一年後に消滅する。資金が尽きたのである。日記には

……原稿を送る速達のコもなくなった。このごろは貧乏にすっかり馴れてしまった（一九三六年十一月二十三日）

さらには――

午後出社。電話が切断されたまゝなのでその払込金三十五円余を作るために、写真機を質屋へ持って行く……（一九三六年十一月二十日）

と書かれている。

カメラは消滅し、もう、あらたな図像が作り出されることもなくなつた。加えて、その二か月後の一九三七年一月には貴司は究極の拘禁を受ける。環境劣悪な警察の留置所に無期限に拘禁し続けるといふアウシュビッツ的な、緩徐で持続的な致死拘禁と、『文学案内』をすべて「共產主義の宣伝とみなす」という司法の威迫によつて、貴司の生きざまは、自身の言によれば「肉体が変化した」といふ変化を遂げる。

カメラは恐らく質流れしてしまつただろう。小林多喜二の遺体にはじまる、大名刺判ガラス乾板に刻まれたモノクロームの世界は、ここで終わる。

四 その他の図像

大名刺判の他、ハーフサイズの乾板やいろいろなサイズのフィルム類も見出され、未だそのすべてをポジ画像として把握し切れていない。何枚かはゼラチンが融着して復元不能である。とりあえずポジ画像化できたものの中から、背景がある程度わかったものをいくつか紹介する。



図像 10：作家同盟創立総会の会場

・作家同盟創立総
会会場

作家同盟創立総
会は一九二九年二
月九日、浅草寺裏
の信愛会館という
仏教系の会館で開
かれた。貴司がそ

こに出かけた時の様子は自伝「私の文学史」に書かれており、そのおりに撮影したものと推定される。「私の文学史」によると、壇上の議題の掲示の中の「帝国主義戦争反対」が臨場警官の指示で「列強争覇の件」に修正させられた、とあるが写真では「戦争反対」という部分に消し線が引かれているように見える。

・千家元麿 (1888 ~ 1948)

詩人。出雲国造^{いずものくにのみこ}、出雲大社宮司の血統、武者小路実篤に師事し人道主義的作風のなかで、弱者に寄り添おうとする志向



図像 11：千家元麿

が見える。文学
案内社が『蒼海
詩集』（一九三六
年）という豪華
本を刊行し、プ
ロ文運動のシン
パだったと推定
される。

・吉田隆子 (1910 ~ 1956)

作曲家。人形劇団ブークに参加しプロレタリア音楽同盟に加
入。一九三五年頃劇作家久保栄と事実婚（久保に妻があったため）
「楽団創生」を組織しバルトークやショスタコービッチなど斬
新な作曲家の紹介に取り組んだ。四回の拘禁を経験し健康を損
ね、四十六歳で死去。そのユニークな生涯は二〇一二年九月N



図像 12：吉田隆子

HKのドキュメ
ンタリーとして
放映され、代表
作「ヴァイオリ
ンソナタニ調」
のCDも出てい
る。

この女性の

ポルトレート原版がのこされているのは、築地小劇場で新協劇団「ファウスト」公演を取材したとき、この芝居の音楽作曲家だった彼女がいあわせたためであろう。



図像 13：大宅壮一

・大宅壮一（1900～1970）

よく知られたジャーナリスト、社会評論家というべき人物だが、大阪の出身で、第三高等

学校のころは賀川豊彦に傾倒しマルクス主義を信じていたといわれている。しかしジャーナリストイックな才能が勝っており、三十三歳のころ早くもゴシップなども交えた批評雑誌『人物評論』を発刊。内容は毒舌も多いが文学評論が中心である。『文学案内』にも何度も評論的文章を寄稿している。

・島木健作（1903～1945）

いわゆる「転向文学」の代表的作家であり「癪」「生活の探求」などがベストセラーになった。札幌出身で、東北帝大を中退して香川県の日本農民組合支部書記となり農民運動に従事したが、三・一五事件で捕まり、在獄中に結核の重篤化で一九三二年



図像 14：島木健作

仮釈放となった。獄中で転向しており、他方、農民運動から作家に「転向」したという意味でも注目された。

『文学案内』にも常連のように小説、短文をよせ座談会のメンバーにもなっている。



図像 15：中野重治一家

・中野重治一家

右から中野重治、妹鈴子、父藤作、妻原泉。『文学案内』のキャプションによると出所後間もない頃、とされているので一九三四年夏と推定される。

(1) 『新日本文学』一九五〇年二月号 二六〇四四頁「座談会 小林多喜二の死とその前後」出席者 小林セキ、小林三吾、岡本唐貴、江口渙、立野信之、笹本寅、藏原惟人、手塚英孝、佐々木孝丸、青柳盛雄、原泉、徳永直、間宮茂輔、壺井栄、貴司山治。

(2) 笹本寅：[1902生〜1976没*以下同]編集者、時代小説家。佐賀県唐津の出身。春秋社で中里介山『大菩薩峠』の刊行担当。一九三一年時事新報記者となり小林多喜二虐殺の報道に関わる。一九三五〜三六年度文学案内社刊行の雑誌『実録文学』に参加、発行名義人となる。一九三八年海音寺潮五郎らと『文学建設』創刊、数年後脱退。一九四一年『会津土魂』で第一回野間文芸奨励賞受賞。戦後は故郷唐津に帰り郷土文化につくす。

*なお、本文と脚注の人物の経歴、生没年などの基本情報はウィキペディアなどネット検索情報によっている。

(3) 安田徳太郎：[1898〜1983]医師、社会運動家、山本宣治の従弟で、大きな影響を受けたという。小林多喜二の虐殺屍体を検屍し記録した。戦後は一九五〇年代のベストセラー『人間の歴史』全6巻、『万葉集の謎』など文化史的大衆本の著者でもある。

(4) 小林多喜二の遺体の外況…この写真は貴司のネガに含まれておらず、時事新報カメラマンが密かに撮影したものと推定される。『写真集 小林多喜二——文学とその生涯』新日本出版社一九七七年刊 七八頁より複写)

(5) 伊藤ふじ子：[1911〜1981]多喜二虐殺の翌日(二月二十一日)「妻だ」と名乗って築地小劇場と馬橋の小林宅に現れ、壮絶な別離を演じていずこかへ消えた女性が伊藤ふじ子であったことは、ほぼ確定的である。前記「座談会」での貴司、原、壺井栄の発言、ことに原の言葉はそれが誰であったか分かっていった

と思われる文言も含まれている。(座談会の時点で伊藤ふじ子が再婚し平穏な生活を送っていることがわかっていたので、あまい言及になったと思われる)

また図像1、2にその姿が留められている小坂多喜子(プロレタリア詩人上野壮夫夫人)の「小林多喜二と私」[『文芸復興』(第二次)一九七三年四月号、文芸復興社、九頁]にもこの夜、彼女の面前で展開された別離のドラマが「如何に愛人に死なれても、あれほどの愛の表現は私にはできないと思われた。」「私はその女性の出現によほど魂を奪われてしまったのか、その後の一切のことを忘れてしまっている。」とまでの言葉で書き記されている。

(6) 大名刺判カメラ…具体的なか메라の名前はわからないが、漸く一枚探し出した不鮮明な写真から見ると、六桜社発売のリリーあたりではないかと想定される。子供の顔ほどの大きさがあり、スベアの乾板やホルダーを加えると相当な大荷物である。



図像 16：大名刺判カメラ

(7) 閃光電球(フラッシュバルブ)…爆音と煙をともしないとてもスナップ的な撮影には使えないマグネシウムに代って、閃光電球が一九三〇年頃から実用化された。

(8) 柳瀬正夢：[1900〜1945]画家、愛媛県出身、一九二〇年読売新聞社員、一九二五年プロレタリア芸術聯盟に参加『無産者新聞』編集に関わる。貴司家に入り浸り、写真現像などの技術を学ぶが、おそらく「組織」と貴司との連絡係のような役割も

果たしていたと思われる。敗戦の年五月空襲にあい新宿駅で死去。貴司の自伝『私の文学史』には「……三時間もおくれてきて『少しおそくなりました』と何でもないようなニコニコ顔をしている柳瀬には、腹が立つよりも呆れてしまった。……柳瀬正夢という男の時間のルーズなものには、かれが死ぬまで悩まされた。」とある。「死ぬまで」とは、新宿駅での不慮の死が確認に手間取ったことを含めて、ユーモラスに愛惜したものと思われる。

『私の文学史』は未公刊。「貴司山治 net 資料館」で全文公開。柳瀬の記事は第六章四節。

- (9) 小野春夫：[1910～1986] 記録映画監督、児童文学作家、岡山県出身。上京当時文学案内社勤務。戦後は農村記録映画製作者（『飛騨のたくみ』など）、児童文学（『マタギの里』など）

- (10) 世田三郎（坂井徳三）：[1901～1973] プロレタリア詩人、中国文学翻訳家、著書に『坂井徳三詩集』（一九七三年）、翻訳に丁玲『太陽は桑乾河を照らす』（一九五六年）、『中国解放詩集』（一九五三年）などがある。